第１章

過去を知る

●特集　災害に備える

明治、昭和、平成と災害に見舞われた普代村の歴史

津波、山林火災と村を襲った自然災害

明治二十九年六月十五日、村を襲った「三陸大津波」。村の被害は、流失倒壊家屋七十八戸、死亡者三百二人となっています（資料・山下文男「哀史　三陸津波」）。

昭和八年にはまたも大津波が襲来します。当時小学生だった子どもの一人は作文にこうつづっています。

「三月三日午前二時半ごろとてもひどい地震でした。寝ているものははねおき時計はとまるやうでした。それから約三十分くらいたちますと、下の方から津波だ助けてくれと叫ぶ者がありました。するとおぢいさんやおばあさんは「そら津波だ」といってはね起きました。そして家中の者は一度に津波だーといって裏の山に逃げあがりました。それからしばらくたっても人の叫び声はたへませんでした」。（ふるさとふだい昭和の記録「子どもたちの津波体験」から抜粋。原文のまま）

三陸大地震は、昭和八年三月三日の午前二時半ごろ宮古東南沖千二百キロの海底で発生したマグニチュード八・三の大地震で、約四十分後の午前三時十分三陸沿岸に大津波が襲来しました。

明治、昭和と大津波に見舞われた村は、その後も多くの自然災害に襲われます。

「三陸火災（フェーン火災）」（昭和三十六年五月二十九日）は、全焼家屋が百三戸、二千ヘクタールの山林が焼失（**写真①**）。昭和五十六年九月二十五日の大雨では、普代川が氾濫し、家屋浸水が続出しました（**写真②**）。

平成に入ってからは、三年二月十五日、猛烈に発達した低気圧の通過で、水産、漁港関係に被害が続出（**写真③、④**）。十二年七月八日には大雨と暴風で普代川が決壊。床下や床上浸水、道路や漁港施設など約八億八千万円の被害となりました（**写真⑤**）。

今までの考えでは想像できない時代に

これまでのように村は明治、昭和、平成と幾多の自然災害に見舞われてきました。幸い明治、昭和の三陸大津波以外は、人的被害が少なく、日ごろの防災意識とこれまでの教訓が実を結んだものと考えられます。

しかし、近年、阪神大震災や新潟県中越地震のように、私たちの想像を超える自然災害が起こっています。大きい災害になればなるほど、役場、消防の機能は低下し交通や通信の手段も無くなります。

これからは、大災害を考えた一人ひとりの備えが必要となってきます。自然災害の被害を最小限に食い止めるのには、やはり普段からの備えに掛かっているのです。次ページでは、大災害を想定した「備え」を考えます。

る大雨で床上浸
区の民家
7月9日）

証言

昭和三陸大津波を体験した
赤坂季一さん(86)太田名部
あかさか・きいち

強く長い地震と真っ白い津波が

当時の漁師は小魚の延縄をやっていて、午前一時ごろから浜で準備をしていました。それで津波が来ることが、いち早く分かりました。

あの時の地震は長く続き、最初は立っていられないくらいでした。三十分くらいたって何事もなかったので、また、布団に入りました。そしたら浜の方から「津波だー」という声がして、急いで布団から飛び起き、高台に逃げました。

沖を見たら津波は真っ白く、何万ボルトの電気を付けたように明るく見えました。波が引いた後は「助けでけろー」という声が響き渡っていました。